

# 男性日本語研究者は女性より多くの論文を書くか

——『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる男女別年齢別論文生産性——

萩野 綱男

キーワード：論文生産性 男女差 年齢差

## 要旨

最近、日本語研究の分野でも女性研究者の占める比率が高くなっている。しかし、まだ全体の1割程度である。論文執筆時の年齢を男女別に調べると、女性のほうが若干若いという結果になるが、これは生年別の分布が男女で違っているためかもしれないので、女性のほうが若いうちに論文を書くということとはできない。最近30年間の変化を調べると、男女とも執筆年齢が高くなる傾向がある。これは特に男性に顕著である。分野ごとに執筆者を男女に分けて集計すると、日本語教育の分野に女性研究者が多い。論文生産性の面では、女性の生産性は男性の8割程度という結果になるが、30年以上前と比べると最近では男女差が小さくなる傾向があり、今後は男女差はなくなると思われる。年齢別では、女性は30代で生産性が落ちる傾向がある。これは子育ての時期と一致し、女性研究者の場合、子育てのために論文生産が思うようにできない面がある。

## 1. はじめに

日本語については、いろいろな研究が行なわれ、その結果としての論文が大量に発表されている。そのような日本語研究という分野を全体としてながめる場合には、二つの観点がある。一つは論文に焦点を当てることであり、もう一つは研究者に焦点を当てることである。

従来は、個々の論文に焦点をあてるのが普通であった。研究者がどのような人であれ、研究の流れの中では論文だけが生き残り、まわりの人々や後世に影響を与えるのであって、それを書いた研究者は（名前だけは残るかもしれないが）消えゆくのみである。

しかし、一方では、そのような論文を書く人間、すなわち日本語研究者に焦点をあて、日本語研究者の自画像を描くこともまた重要である。どのような研究者がどのよ

うな論文を発表しているかという問題は、まさにその分野の全体像を描くことに他ならない。ある意味での「展望」に相当するといえる。

研究を進めるのは研究者という人間そのものであり、研究の進展には研究者の個人のさまざまな条件が関係してくる。人間の一生を考えても、若いときには基礎的な勉強から始めても、年を経るにつれてしだいに高度な研究へと進んでいくものである。また、年齢に応じて仕事の中身も変化してくるのが普通である。ということは、研究者の場合、研究の傾向も変わってくるのではないか。

男性と女性の違いも考えられる。女性は子供を産む性であり、そのことが研究活動になんらかの影響を与えることは否定できない。また、戦後になってから女性の社会進出が目立つようになったが、日本語研究者の社会においても同様の傾向があるのではないか。

本稿では、日本語研究者に焦点をあて、男女別・年齢別に見て、どのような研究活動が行なわれているのかを明らかにするものである。年齢別の詳しい結果については、国語学会で発表し[1]、近く論文として公刊される[2]ので、そちらを参照していただきたい。本稿は、その続編とでもいうべきものである。

## 2. データの整備上の問題

調査対象は、秀英出版から出ているフロッピー版の『日本語研究文献目録・雑誌編』に収録されている全部の論文とした。また、日本語研究者3114人分の個人データベースを用意した。これらの作成や利用上の問題点については、すでに前稿[1]で示したので、ここでは、省略する。

今回、個人データベースには、性別情報を付加した。個人データベースは、国語年鑑の過去30年分を基本にしているので、性別はついていない。そこで、基本的には、名前で性別を判断することにした。これは、山崎[3]と同様の方法である。ただし、名前（の漢字）だけでは間違えてしまうような場合もあるので、機械的に決定するのはまずい。たとえば沢田治美・由良君美などの男性研究者の例がある。そこで3000人をひとりずつ見て男性・女性・不明の3区分で判断した。その際、名前だけでは性別が推定不能な場合でも、出身大学が女子大学であれば、女性とした。

こうして残った性別不明者については、その人を知っていそうな研究者（同じ大学の後輩など）にたずねて確認した。ただし、全員の性別が判明したわけではない。

### 3. 集計結果とそこに見られる傾向

#### 3-1 生年別の男女比

戦後は女性の社会進出が著しいといわれる。日本語研究者の場合はどうだろうか。

図1は、生年別に見たときの日本語研究者の男女の比率である。国語年鑑以外の資料から拾ったデータも入れているので、1717年生まれの研究者（越谷吾山）も入っている。図の帯の右側はその帯に含まれる人数である。1886年以降は、6年刻みでグループ化してある。Mが男性、Fが女性であり、右端に何も書いてない白い部分があるのは性別不明者である。

図1によれば、1885年以前に生まれた日本語研究者は全員が男性である。1886-1891年にしても性別不明者がひとりいるだけである。荻野の個人データベースに登録されている中では、最初の女性日本語研究者は、1892年生まれの川島つゆ氏である。女性の比率はその後ずっと低いままであるが、1934-1939年生まれから比率が高くなり、全体の10%以上をしめるようになる。1934-1939年生まれといえば、生まれは戦前でも教育は戦後を受けた人々であり、やはり戦後の女性の進出が観察される。

このように、女性研究者は戦後に輩出しているということは、このあとの集計結果を見ていくときに注意を要する点である。

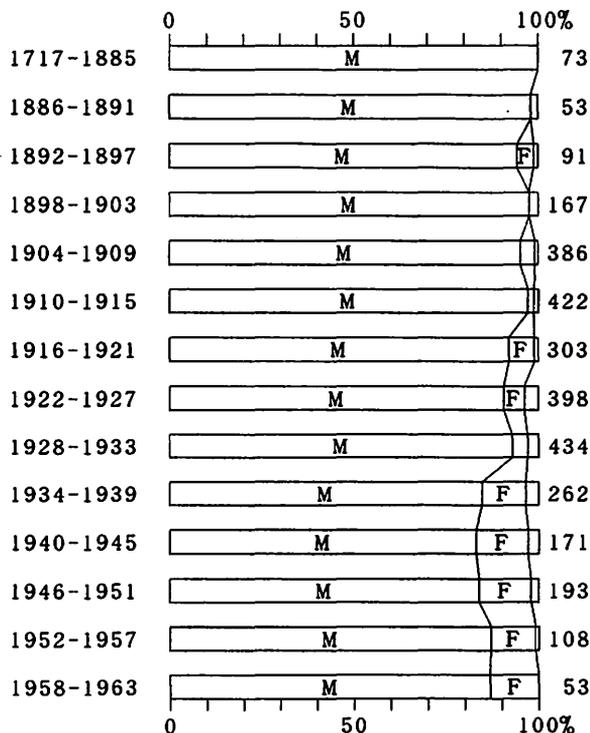


図1 生年別の日本語研究者の男女比

### 3-2 男女別年齢別に見た論文の量

図2は、男女別・年齢別に論文の本数とページ数を集計したものである。ただし、グラフの見やすさのため、単位幅3歳でスムージングの処理をほどこしてある。研究者の中に占める女性の比率が約5%であるので、男女を同じスケールにのせて示しても傾向がつかめない。そこで、ここでは女性の論文の本数を10倍に拡大してグラフ化した。また、論文のページ数は、論文1本あたり約9ページであるので、女性のページ数をそのままのスケールにし、男性のページ数を10分の1にして示した。

図2によれば、男性は46歳がピークであるが、女性は42歳(本数)あるいは43歳(ページ数)である。論文執筆時の平均年齢を計算すると、男性が48.54歳、女性が45.13歳である。図2の山型の形を男女で比較すると、女性のほうがやや若いほうに偏っているといえる。

ただし、この結果から単純に女性研究者のほうが若いうちに論文を書くというとはできない。図1で見たような、研究者の生年の分布の男女差があるので、男性研究者には若い人から老人までが含まれるのに対し、女性研究者はあまり老人がいないという事情が反映していると考えられる。この点については、さらに後述する。

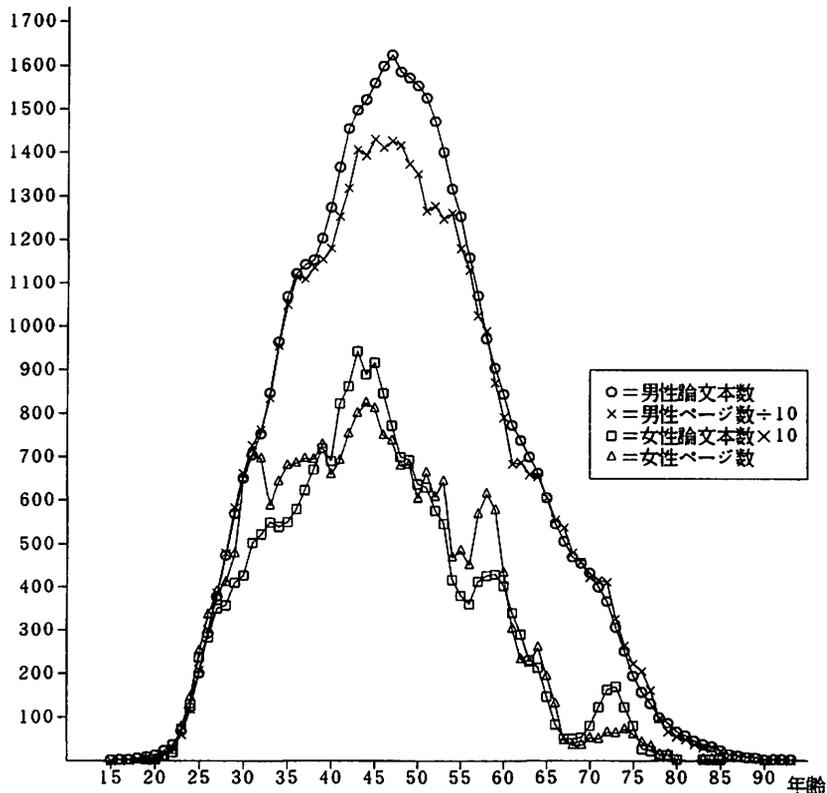


図2 男女別・年齢別の論文本数とページ数

表1 刊年別の論文本数とページ数

刊年	男性の論文			女性の論文		
	本数(比率)	ページ数(比率)	平均年齢	本数(比率)	ページ数(比率)	平均年齢
1953	1039(97.83)	6317.73(98.20)	44.09	23(2.17)	116.00( 1.80)	37.48
1954	1100(98.39)	6684.70(98.33)	44.69	18(1.61)	113.33( 1.67)	41.39
1955	1213(98.30)	6878.78(98.15)	45.00	21(1.70)	129.50( 1.85)	39.38
1956	1191(97.70)	7199.36(97.34)	45.08	28(2.30)	196.75( 2.66)	39.00
1957	1098(98.04)	7807.84(98.06)	44.89	22(1.96)	154.58( 1.94)	41.68
1958	1083(96.10)	7754.75(96.67)	46.00	44(3.90)	267.33( 3.33)	44.45
1959	1319(97.20)	9355.38(96.90)	45.29	38(2.80)	299.50( 3.10)	42.47
1960	1501(97.53)	11955.96(97.81)	45.14	38(2.47)	268.00( 2.19)	42.37
1961	1580(96.99)	11346.62(96.53)	46.19	49(3.01)	408.16( 3.47)	40.55
1962	1452(97.52)	11901.40(97.92)	45.79	37(2.48)	252.95( 2.08)	41.19
1963	1353(96.99)	13677.17(96.99)	45.27	42(3.01)	424.50( 3.01)	38.55
1964	1313(97.55)	12431.56(96.75)	46.54	33(2.45)	417.87( 3.25)	44.36
1965	1376(96.22)	12639.84(96.42)	47.06	54(3.78)	469.49( 3.58)	45.96
1966	1363(96.19)	13126.19(96.34)	46.86	54(3.81)	498.97( 3.66)	44.17
1967	1332(96.10)	13588.39(96.77)	47.50	54(3.90)	454.20( 3.23)	38.98
1968	1768(96.24)	16808.17(96.30)	48.78	69(3.76)	645.91( 3.70)	43.36
1969	1523(94.13)	14798.00(92.69)	47.65	95(5.87)	1166.67( 7.31)	44.38
1970	1723(94.77)	17419.81(94.93)	47.68	95(5.23)	931.31( 5.07)	43.97
1971	1434(96.11)	14652.49(96.50)	48.38	58(3.89)	531.79( 3.50)	45.05
1972	1499(94.99)	14714.38(95.44)	49.05	79(5.01)	703.76( 4.56)	43.70
1973	1486(94.23)	13745.28(92.98)	48.61	91(5.77)	1038.18( 7.02)	45.05
1974	1457(95.04)	15109.35(93.71)	49.34	76(4.96)	1013.71( 6.29)	43.66
1975	1610(94.37)	14872.82(93.68)	50.75	96(5.63)	1004.15( 6.32)	45.84
1976	1842(95.19)	20886.53(95.52)	50.27	93(4.81)	979.53( 4.48)	44.26
1977	2032(95.00)	22179.95(93.71)	50.95	107(5.00)	1487.94( 6.29)	46.36
1978	1879(93.44)	15025.69(92.47)	50.72	132(6.56)	1223.87( 7.53)	46.48
1979	1839(92.97)	22259.81(94.70)	51.34	139(7.03)	1245.23( 5.30)	46.18
1980	1914(93.69)	18784.06(94.03)	51.75	129(6.31)	1193.13( 5.97)	48.26
1981	1767(92.37)	19247.51(88.68)	52.77	146(7.63)	2457.77(11.32)	46.71
1982	1832(94.38)	16759.21(94.00)	51.90	109(5.62)	1069.71( 6.00)	49.85
1983	1837(93.68)	25142.04(93.65)	52.40	124(6.32)	1704.53( 6.35)	47.95
1984	1803(93.37)	23686.05(94.31)	52.44	128(6.63)	1429.01( 5.69)	48.65

### 3-3 刊年別に見た女性の年齢構造

表1は、刊年ごとに男女別の論文本数とページ数、および執筆時の平均年齢を集計したものである。表1からは、全体として最近になればなるほど女性の比率が増加していることが読み取れる。本数でもページ数でも同様の結果である。また、平均年齢を見ると、この30年間に男性はだんだん高くなってきていることが明らかである。女性は男性ほどはっきりした傾向を示さないが、やはりいくぶんか高齢化の傾向がある。女性の高齢化がはっきりしないのは、若い女性研究者が次々と参入してきているためであろう。

図3は、刊年を10年刻みにして、年齢を1歳刻みにした女性の論文本数のグラフである。1953~1964年は、山が低く、やや若年のほうに偏っていたものが、1965~1974年、さらには1975~1984年になると、やや高齢化しながら山が高くなっていくことがわかる。

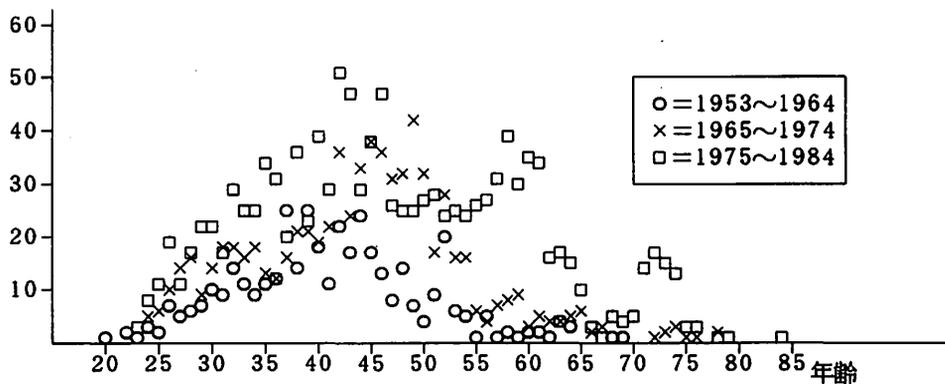


図3 刊年10年刻みに見た女性の年齢別論文本数

### 3-4 分野ごとの男女差

表2は、分野別・男女別に論文数と執筆時の平均年齢を算出したものである。分野の順序は男性の平均年齢の順（つまりは全体の平均年齢の順）である。論文数では、日本語教育だけが群を抜いて女性の比率が高いことが読み取れる。

分野ごとに男女の年齢を見ていくと、多くの分野で女性のほうが年齢が低く出ていることがわかる。これは前に述べた全体の傾向と重なるものである。その傾向と反対に女性のほうが男性よりも平均年齢が高いのは、音声・音韻、マスコミュニケーション、言語学、といったところである。女性の論文の本数が少ないので、一部の研究者が高年になっても活発に論文を発表すると平均年齢が高くなるというような不安定な要素があり注意が必要である。いずれにせよ、平均年齢を見る限りでは、男女差は比

表2 分野別の論文数と年齢の男女差

男 性		女 性		分 野	
論分数(比率)	年齢	論分数(比率)	年齢		
412(98.33)	42.97	7(1.67)	34.71	K 日本語情報処理	KIKAI.DAT
421(93.35)	44.55	30(6.65)	39.27	G 待遇表現	TAIGUU.DAT
2996(95.05)	44.99	156(4.95)	40.73	F 文法	BUNPOU.DAT
1717(94.08)	44.65	108(5.92)	47.24	C 音声・音韻	ON-IN.DAT
2808(94.83)	45.22	153(5.17)	40.01	J 方言	HOUGEN.DAT
1734(95.59)	45.90	80(4.41)	39.05	B 国語史	GOSI.DAT
956(97.75)	45.55	22(2.25)	48.09	M マスコミュニケーション	MASU.DAT
2440(96.25)	46.48	95(3.75)	45.46	T 書評・紹介	SYOHYOU.DAT
1222(97.92)	46.81	26(2.08)	45.69	D 文字・表記	HYOUKI.DAT
2361(94.14)	47.32	147(5.86)	41.07	H 文章・文体	BUNSYOU.DAT
528(73.23)	47.67	193(26.77)	47.24	Q 日本語教育	NIHONGO.DAT
3289(92.99)	47.44	248(7.01)	51.09	R 言語学	GENGO.DAT
367(93.62)	48.03	25(6.38)	43.96	S 国語研究資料	SIRYOU.DAT
3846(94.06)	49.25	243(5.94)	43.68	E 語彙	GOI.DAT
13692(97.29)	49.48	381(2.71)	44.70	P 国語教育	KOKUGO.DAT
2300(94.57)	50.37	132(5.43)	47.64	L コミュニケーション	KOMI.DAT
4065(95.69)	51.36	183(4.31)	45.15	A 国語学一般	IPPAN.DAT
1407(95.65)	52.86	64(4.35)	52.20	I 古典の注釈	KOTEN.DAT
1985(98.61)	56.46	28(1.39)	56.79	N 国語問題	MONDAI.DAT

較的少ないといってよかろう。日本語教育のように、女性が集中している分野もあるが、それぞれの分野の中での研究者の年齢構造はあまり変わらないのである。

### 3-5 男女別に見た論文生産性

ここでは、男性研究者と女性研究者でどちらのほうが論文生産性が高いかを調べてみよう。論文生産性というのは、研究者単位で見たときにどれくらい論文を生産するかという尺度であるから、この問題を言い替えば、男性研究者と女性研究者とではどちらが論文をたくさん書くかということになる。

実は、この問題はそう簡単には論じられない。論文生産性は論文総数を研究者数で

割って求めればよいのだが、30年間に研究者の数が変動していること（詳しくは荻野[2]参照）により、割る数の方が確定しにくいという問題がある。さらに重要な問題がある。すでに見てきたように、論文を生産するのに年齢が重要なファクターになっている。しかも最近になるほど女性研究者の数が増えているということは、全体を見れば女性の方が年齢分布が若いほうに偏っているわけで、それもなんらかの形で補正しなければならない。

荻野[1][2]では、個人ごとの論文生産期待値（当該研究者がもしも長寿をまっとうした場合、一生涯に何本の論文を書くかと推定できるか）を算出し、これで研究者個人ごとの生産性を評価している。これを男女別に集計するのも一つの方法である。その結果、生産性を計算することができ、かつ性別が判定できた研究者数で見ると、男性研究者は2271人で、平均50.07本、女性研究者は153人で、平均40.11本ということになった。単純に言えば、男性のほうが女性よりも論文生産性が高いといえそうである。その差は、研究者ひとりの一生あたりで約10本に相当する。

ただし、上の方法は「期待値」というものがあくまで架空の数値（もしもその研究者が長生きしたら、という数値）であるところに問題が残る。そこで、次のような別の方法を考えてみた。

荻野の作成した個人データベースは、過去から現在までの主だった日本語研究者をほぼ網羅したものになっており、そこには誕生日と死亡年が記録されている。そこで、このデータベースから算出して、1953年には、何歳の研究者が何人いたかを求める。これを、1953年から1984年までの範囲で、年齢20歳から90歳についてすべて求める。一方、論文データベースで1953年から1984年までに刊行された論文の著者の年齢を求める。両者を突き合わせると、1953年から1984年までの1年ごとに、20歳から90歳までの1歳ごとに、何人のグループで何本の論文を書いたかがわかる。すなわち、刊行年・年齢別の生産性が算出できたことに相当する。これを男女別に求めれば、男女差が検討できる。

実際の表は、32×71の大きな表なので、そのままここに載せることはむずかしい。そこで、4歳あるいは4年ごとに平均し、全体を1/16に圧縮して示すことにした。その結果が表3と表4である。ほとんどのところの数値が1.0をやや下回る数値になっている。すなわち、研究者ひとりあたり、1年に論文を1本弱書いていることになる。この全体を合計し平均すると、表5のようになる。ここでも、女性の論文生産性は男性の8割に相当するという結果になる。

では、刊年別・年齢別に見たとき、論文生産性の男女差はどのように現われるだろう

表3 男性研究者の刊年別・年齢別論文生産性

	刊年(西暦19--年)							
	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
20-23	0.037	0.054	0.043	0.023	0.038	0.016	0.029	0.076
24-27	0.127	0.156	0.216	0.246	0.261	0.239	0.492	0.594
28-31	0.302	0.378	0.395	0.461	0.598	0.678	0.756	0.884
32-35	0.486	0.558	0.642	0.522	0.779	0.714	0.949	0.964
36-39	0.675	0.606	0.733	0.761	0.750	0.936	0.972	1.064
40-43	0.685	0.696	0.777	0.746	0.912	0.882	1.376	1.071
44-47	0.790	0.630	0.625	0.789	0.819	0.960	1.094	1.395
48-51	0.669	0.734	0.700	0.638	0.768	0.850	1.077	1.116
年齢 52-55	0.727	0.637	0.734	0.573	0.548	0.754	1.023	1.027
56-59	0.818	0.655	0.578	0.675	0.573	0.473	0.835	0.807
60-63	0.552	0.694	0.633	0.590	0.520	0.493	0.509	0.685
64-67	0.644	0.626	0.634	0.474	0.485	0.495	0.494	0.411
68-71	1.495	0.705	0.277	0.466	0.324	0.417	0.491	0.419
72-75	0.780	0.931	0.522	0.262	0.372	0.213	0.389	0.455
76-79	0.640	0.211	0.413	0.387	0.237	0.302	0.241	0.243
80-83	0.364	0.280	0.257	0.264	0.167	0.215	0.381	0.164
84-87	0.034	0.143	0.000	0.357	0.129	0.132	0.156	0.202

表4 女性研究者の刊年別・年齢別論文生産性

	刊年(西暦19--年)							
	53-56	57-60	61-64	65-68	69-72	73-76	77-80	81-84
20-23	0.017	0.012	0.028	0.000	0.000	0.000	0.071	0.063
24-27	0.063	0.034	0.141	0.222	0.197	0.224	0.472	0.571
28-31	0.254	0.188	0.121	0.235	0.361	0.295	0.612	0.566
32-35	0.121	0.429	0.208	0.207	0.435	0.597	0.492	0.836
36-39	0.727	0.136	0.683	0.271	0.500	0.518	0.806	0.590
40-43	0.667	0.818	0.379	1.016	0.479	0.776	0.906	0.806
44-47	0.091	1.125	0.970	0.591	1.177	1.000	0.948	0.741
48-51	0.419	0.212	0.583	0.818	1.091	0.763	0.833	0.759
年齢 52-55	1.000	0.774	0.182	0.583	0.818	0.727	0.525	0.938
56-59	0.400	0.000	0.226	0.485	0.333	0.818	0.712	0.966
60-63	0.200	1.200	0.500	0.194	0.242	0.333	1.636	0.636
64-67	0.000	0.300	0.000	0.000	0.258	0.242	0.375	0.606
68-71		0.000	0.200	0.000	0.000	0.148	0.548	0.292
72-75			0.000	0.400	0.600	0.000	0.800	0.966
76-79				0.000	0.100	0.600	0.000	0.190
80-83					0.000	0.000	0.000	0.000
84-87							0.500	0.000

うか。

図4は、刊年別の結果である。表3と表4のもとになった1年刻みの表を、年齢を無視して刊年別に集計したものである。当然のことながら、論文数を合計し、研究者数を合計して延べ人数を求め、それで割って生産性を算出した。

図4を見ると、男性・女性ともに論文生産性の数値が次第に高くなっており、この30年間で研究者がいつそう論文を多く書くようになったことがわかるが、とりわけ女性の伸びが著しい。論文生産性は、1950年代には男女の差が2倍近くあったのに対し、1980年代にはほとんど差がなくなっている。全体として、女性研究者が男性研究者よりも論文生産性が低い（約8割）ように見えるが、それは時代差を無視したためである。戦後すぐの時期は女性が社会的に活躍するのは多くはなかったはずである。それまでの男尊女卑の傾向はまだ残っており、女性のほうが家事負担が多いとか、収入が少ないとか、いろいろな事情があって、論文の生産も思うようにできなかったのではないか。しかし、最近では、社会一般の傾向としてそのようなことも少なくなっており、研究者の世界では、特に男女差別の問題もずっと少なくなっているのではないか。したがって、論文生産性も男性と同様になってきたのである。

図4に現われた傾向を延長して考えれば、研究者の生産性という面からは、現在（すなわち1993年）ともなれば、女性が男性を凌駕する時代になっていてもいいはずである。しかし、図4の回帰直線を未来に延長することは必ずしも正しくない。今までの30年間は女性研究者の研究環境の改善ということで論文生産性がより高くなってきたが、これからはそういうことは期待できない。実際、男性研究者と条件が同等になったということであって、女性研究者が優遇されるような構造にはなっていない。した

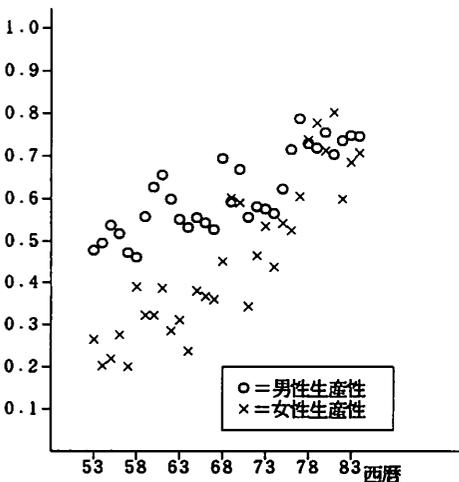


表5 男女別の論文生産性

	男性	女性	全員
論文数	48514	2321	51452
延べ人数	78916	4754	85511
生産性	0.615	0.488	0.602

※全員のところは性別不明者も含まれているので、男性+女性よりも数値が大きい。

図4 男女別・刊行年代別の論文生産性

がって、男性と女性の生産性はほぼ等しくなって、その後は変動しないのではないか。このあたりは、今後1984年以降のデータが利用できるようになったらぜひ確認したいことである。

図5は、刊行年を無視して年齢別に論文生産性を平均したものである。高年齢の女性のところで生産性の数値が大きく上下しているが、これは、もともとデータが少なく、やや不安定な結果になっているためである。

図5では、40代をピークにして、山型のカーブが見られる。男性は46歳がピークで0.902、女性は（70歳以上を無視すれば）42歳がピークで0.982である。男女差を見ると、30歳～40歳くらいに目立つ。このあたりは女性の論文生産性が男性よりも下がってしまい、6割程度になっている。40歳以降は、1歳ごとには変動があるが、大局的に見て大きな男女差はない。

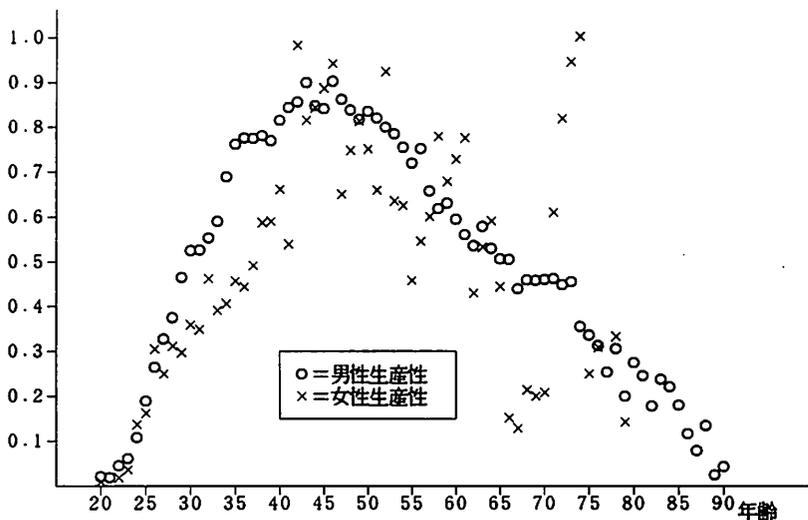


図5 男女別・年齢別の論文生産性

図5では、女性研究者の30代の論文生産の落ち込みが明らかになったわけであるが、これは子育てのためであろうと容易に推定できる。現在でも子育ての負担は女性に大きい、昔はもっと女性の負担になっていたと考えられる。このデータには1953年以降のデータが含まれているわけであるから、そのような大きな子育ての負担を考慮すると、図5のような結果になるのももっともだということになる。

コールとズッカーマン[4]は、アメリカの科学者の男女差について、女性よりも男性のほうがたくさん論文を書く傾向があるが、それは女性の結婚や家事の負担に原因があるのではないという結論を出している。しかし、この結論はやや疑問である。

120人のインタビューに基づく結論だそうだが、人は自分のことは意識できても他人のことは意識できないので、他人と研究状況について比べることはできないし、報告されている個々のケースについても、子育ての時期にはいわゆる「自由時間」がなくなったと述べているのであって、やはり、広い意味で研究に影響があったと見るべきである。さらに、コールとズッカーマンの結論が仮に正しくても、それはアメリカという社会の、数学・物理・生物といった分野（研究室で実験をするスタイルが確立しており、共同研究が多くて、共著の論文が多い分野）を中心とした話であって、それを他の国、他の分野に当てはめて考えることは危険である。

以上のことを考慮して、日本における日本語研究者の場合は、女性研究者は子育てによって研究の進展に若干のマイナス影響があると結論したい。

#### 4. おわりに

本稿で見てきたように、研究（論文執筆）を量的側面からながめると、年齢や性別によって大きな差があることがわかった。すなわち、研究を進めるということは、年齢や性別によって規定される部分があるということである。

研究は、言語行動の一断面であり、人間行動の一断面であるから、そこには研究者の生き方が反映することになる。言語行動の研究において、行動する主体としての人間研究は欠くことができないが、研究に関する研究でも、同様に研究者の存在を無視しては成り立たない。

今まで、日本語研究の世界では、研究史や概説・展望という形で、研究をながめ渡すことが行なわれてきたが、研究者をながめることはほとんど行なわれてこなかった。参考になる文献といえば、カミングス[5]や有本[6]など、科学社会学の分野に限られていて、しかも、当然のことながら、日本語研究の世界を扱ったものはない。

本稿（および荻野[1][2]）は、日本語研究者を正面から取り上げ、研究者がどんな人間であり、またどのように研究を進めているかを調べたものである。いずれにしても、これらはそれ自身が「研究」であって、研究者の実態の記述に重点があり、この実態を踏まえて日本語研究の世界がどのようにあるべきか、今後どのようにするべきかという「政策」を論じるものではない。「政策」については、研究者が行なうべきものではなく、政治家・行政関係者・文部省・学界の中心人物など、しかるべき組織で考えるべきものであると思う。

今後は、研究者の年齢や性別以外のさまざまな側面についても研究していきたいと考えている。

補注：

山崎[3]は、共著者の男女差について言及している。これもおもしろい問題であるが、山崎以上の知見は得られないと判断し、今回は扱わなかった。

謝辞：

青山学院大学の近藤泰弘氏は、荻野からの多人数の性別の質問に答えてくださった。ここに記して謝意を表す。

参考文献

- [1] 荻野綱男 (1992.5) 「日本語研究者はいつ論文を書くか—『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる年齢構造—」 国語学会平成4年度春季大会要旨, pp. 107-114
- [2] 荻野綱男 (投稿中) 「日本語研究者はいつ論文を書くか—『日本語研究文献目録・雑誌編』に見られる年齢構造—」 国語学第173集
- [3] 山崎誠 (1990.3) 「『日本語研究文献目録・雑誌編』にみる国語研究の動向」『国立国語研究所報告101 研究報告集11』秀英出版
- [4] J. R. コール・H. ズッカーマン (1987.4) 「結婚・母親業と研究活動は両立するか」サイエンス Vol. 17, No.4
- [5] ウィリアムK.カミングス (1972) 『日本の大学教授』至誠堂
- [6] 有本章 (1981) 『大学人の社会学』学文社

(おぎの つなお・筑波大学助教授)